

# トライアル脚本

著：福嶋 亮平

## 「トライアル脚本」・登場人物表

フリオ	「赤の紋章」を身に宿す勇者。
ドゥアグ	『剣聖』の称号を持つヴァルド族の男性。
セレス	「青の紋章」を身に宿すエルフ族の女性。

丈の短い草が生い茂る草原。金属製の軽鎧を纏った青年が真剣な表情で剣の稽古に励んでいる。

フリオ 「……はっ！ っせい！ ……おらっ！！」

ひと際大きく剣を振り抜いた瞬間、遠くに馬の嘶きと悲鳴が響き渡る。

SE： （馬の嘶きと男女の悲鳴）

フリオ 「——っ！？ これは、只事じゃなさそうだな……！」

音のする方に駆け付けるフリオ。巨大な蜘蛛型の魔物に襲われる商隊の姿を目にする。

フリオ 「ハッ！ 随分と楽しそうなことになってんじゃねえか。だが、お客さん方、こちらはパーティ会場じゃありませんぜ！」

魔物の群れを相手に大立ち回りを繰り広げるフリオ。だが、圧倒的な物量に次第に押され始める。

フリオ 「ちっ！ こいつら一体、何匹居やがるんだ！」

「俺はともかく、商隊の連中が、そろそろやべえな……。こんな時に限って、セレスの奴はいねえしよ……！」

ますます形勢は悪化。戦線が崩壊し、魔物の群れが雪崩れ込もうとした瞬間、後方の群れが大きく吹き飛ぶ。

フリオ 「！！——くそっ、新手か！？」

ひと際大きく魔物が吹き飛んだ直後、動きやすそうな金属製の軽鎧に身を包んだ壮年の男が現れる。長大な剣を肩に担ぎ、不敵に笑いながらフリオに声を掛ける。

ヴァルド族の男 「よよよ、若えの。なかなか楽しいことになってんじゃねえか。

ひとつ、オレも混ぜちゃあくんねえか？」

フリオ 「……誰だか知らんが助かる！ ——特別に“参加費”はタダにしておいてやるよ！」

ヴァルド族の男 「へっ、そいつあご機嫌だ！ せいぜい腹いっぱい食い散らかさせてもらおうとするぜ！！」

凄まじい勢いで魔物を蹴散らしていく二人。程なくしてすべての敵を殲滅させる。

ヴァルド族の男 「なんでえ。思ったよか、呆気なかったな。……まあ、死人も出なかったみてえだし、めでたしめでたし、ってとこか」

フリオ 「アンタ、相当の遣い手だな。……まだまだ上には上がいる、ってことを痛感したよ」

ヴァルド族の男 「だっはっは！ 腐るな腐るな。何、お前さんもなかなかいい筋してると思うぜ。 ——さて、楽しい“祭り”も終わったことだし、そろそろお暇させてもらおうとするかな」

あっさりその場を立ち去ろうとする壮年の偉丈夫。慌ててフリオが引き止める。

フリオ 「ちょっと待ってくれ！」

ヴァルド族の男 「おう？ まだ何か用か？」

フリオ 「アンタさえよければ、町で飯と酒でも奢らせてくれないか？  
助けてくれた礼をしたい」

ヴァルド族の男 「おっ、魅力的なお誘いじゃねえか。——だが、オレは相当に食  
うぜ？ 破産する覚悟はあるんだろうな？」

フリオ 「はっ、望むところだ。まあ、もしそうなったら、助けた商隊の  
連中にでも泣きつくさ」

○グレンボルト町内の酒場（夕方）

酔客でごった返す店内。不快じゃない程度の喧噪の中、  
盃を酌み交わす二人。

フリオ 「俺たちの出会いと勝利に——」

ヴァルド族の男 「——乾杯っ！！」

SE： （ジョッキグラスがぶつかり合う軽快な音）

フリオ 「そういや、お互いにまだ自己紹介もしていなかったな。——俺  
は、フリオ。劫魔節を終わらせるために、仲間と旅をしている」

ヴァルド族の男 「だははっ！劫魔節を終わらせるたあ、大きく出たもんだ！ い  
いねえ、嫌いじゃねえぜ、そういうデケェことぬかす奴あ！」

フリオ 「……一応言っておくが、俺は本気だからな」

ヴァルド族の男 「すまんすまん。決して、バカにしたワケじゃねえんだ。気を悪  
くさせたんなら、謝るぜ。さて、オレの番だな。オレの名は……」

一瞬だけ目を細め、言葉に詰まった様子を見せる男。

ヴァルド族の男 「——オレの名は、『クルド』だ。見ての通り、流しの傭兵だ。  
強え奴との出会いを求めてあっちにふらふら、こっちにふらふら、  
ってなもんよ」

フリオ 「その強さなら、それも納得だ。だが、奇遇だな。俺も、以前は  
傭兵として魔軍と闘って——」

??? 「あーっ！ こんなところにいた！！ もう、ホント探し回っ  
たんだからね！！」

甲高い少女の声が、フリオの言葉を呑み込む。突然の闖  
入者に驚いた様子も見せず、後ろを振り返るフリオ。

フリオ 「よお、セレス。首尾はどうだ？」

セレス 「おかげさまで、上々よ。——じゃなくって、勝手に集合場所を  
変えないで、っていつも言ってるでしょう！」

フリオ 「悪い悪い。ちょっとしたトラブルと出会いがあったもんでな」

クルド？ 「おうおう、随分と威勢のいい嬢ちゃんだな。おい、フリオ。二  
人でイチャついてばかりいねえで、紹介しちゃうねえか？」

にやにやと揶揄うような表情を浮かべるクルド。そこで  
初めてクルドの存在に気が付くセレス。

セレス 「あ、私ったらすみません……！ 私は、セレスと言って、フリオ  
と一緒に旅をしています。フリオ、こちらの方は？」

フリオ 「コイツの名前は、クルド。凄腕の傭兵で、さっき草原で危ない  
ところを助けてもらったところだ」

クルド？ 「まあ、そういうこった。これも何かの縁だ。よろしく頼むぜ、  
嬢ちゃん」

セレス 「えっ、危ないところって……、まあいいわ。——フリオがお世話になりました。こちらこそ、よろしく願いますね、クルド、さん……？」

差し出されたクルドの手を握り返すセレス。改めて相手の顔を確認した瞬間、驚きに目を見開いて固まる。途端に挙動不審になるセレスを訝しむフリオ。

セレス 「え、ウソ……?! あれ、『クルド』……?? え、でも。あれ……??」

フリオ 「おい、どうした、セレス。クルドがどうかしたのか？」

セレス 「いや、『クルド』って……! っていうかフリオ、あなた仮にも元傭兵でしょう!? むしろ、何で知らないのよ?!」

フリオ 「“知らない”って、何をだ……？」

セレス 「だから、剣——」

クルド? 「まあまあ、落ち着けよ嬢ちゃん。『大方誰かと勘違いでもしてるんだろ? 他の種族から見たら、ヴァルド族の顔なんて皆、似たり寄ったりに見えるもんさ』」

人好きのする表情を崩さぬまま、セレスだけを威圧するクルド。思わず口をつぐまされてしまうセレス。

セレス 「——っ!! ……確かにそう、かも」

フリオ 「ったく、いったい何だって言うんだ? すまないな、騒がしくしちまって」

ドゥアグ 「いや、賑やかな酒は嫌いじゃない。それより、もっとお前らの話を聞かせてくれねえか」

フリオ 「お安い御用さ。で、何が聞きたいんだ？」

ドゥアグ 「そうだな。まずは——」

気を取り直して話に花を咲かせるフリオとドゥアグ。そんな二人を後目に、ひとり脳内で困惑を募らせるセレス。

セレス (M) 「(何で『剣聖ドゥアグ』がこんな場末の酒場で、フリオと仲良くお酒なんか呑んでいるの……！？ しかも、なぜか正体を隠しているし……！！ っていうか、“嬢ちゃんって、私、あなたより年上だと思いますけどー……！！？！?)」

場面転換。以下、続編。